

日本の未来を拓くよすが(拠)を求めて
—日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う—

「西の文化」の彼方に「東の文化」を構想した人物

天心・岡倉覚三

『茶の本』(1906)出版から百年、さらに没後百年(2013)などを迎えて、近年、岡倉天心の研究はふたたび隆盛を見せてきた。その一端は、『別冊太陽・岡倉天心』(2013)の巻にも、盛り込まれている。危険な国粹的汎アジア主義の扇動者といった評価は、敗戦後の思想史研究の偏りとして一掃されたに等しく、その反対に当時の国際情勢下に天心の思想と行動を据えなおす学術的努力が成果を結ぶようになってきた。それを3点にまとめてみよう。ひとつには東洋美術という概念を西欧世界に定着させた国際的美術行政担当者としての位置づけ。ボストン美術館での活躍の背景には天心・岡倉覚三の「支那・印度」体験が無視できない。第2には、とりわけインドでの宗教刷新運動との関わり。シカゴ万国宗教議会で一躍注目をあつめたヴィヴェカーナンダ(ベンガル名ビベカノンド)との触発から、般若波羅蜜多会を日本で開催しようとした天心らの周囲の動きが、近年、再発掘されてきた。第3には『茶の本』の思想的な射程。九鬼周造らへの伝播も含め、西洋思想に対峙した東洋近代思想の動きには、今日的な意義が再認識されつつある。そこには若き日にシカゴはポール・ケイラスのオープン・コートで仏典翻訳出版事業に挺身した、大拙・鈴木貞太郎も絡まってくる。『道德経』の「道」は近代の東西思潮の交流のなかでいかなる変貌と再解釈を遂げたのか。その思想的・造形的・宗教的意義を問いたい。

稲賀 繁美 (Shigemi INAGA)

国際日本文化研究センター副所長・総合研究大学院大学教授。
1957年東京生まれ、広島育ち。東京大学大学院比較文学比較文化専攻博士課程単位取得退学パリ第7大学統一博士号取得。
専門は、比較文化史、文化交渉史。
著書に『接触造形論』『絵画の臨界』『絵画の東方』『絵画の黄昏』などがある。



目次

はじめに

I 岡倉天心とは

- (1) 岡倉覚三と英語
- (2) 3冊の著作
- (3) 岡倉と日本の美術

II インドへの旅

- (1) ヴィヴェーカーナンダとの触発
- (2) ニヴェーディターの存在

III インドに対するメッセージ

- (1) 弟子のインド派遣が意味するもの
- (2) インドのアイデンティティを守る
 - ① ラビンドラナート・タゴールとの出会い
 - ② ハベルの主張と岡倉のメッセージ
 - ③ インドの象徴と日本の技法
- (3) 岡倉天心が残したもの

質疑応答

2016年8月18日開催

第38回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：天心・岡倉覚三

講演者：稲賀 繁美（国際日本文化研究センター副所長、総合研究大学院大学教授）

（文中敬称略）

はじめに

本日紹介する天心・岡倉覚三という人物は、近代の日本が生んだ国際派の知識人として最も有名な人の一人だということは皆様もご了解いただけると思う。「天心」といえば国粹主義的な思想を世界に広めた人物だとか、20世紀の初頭に超国家主義の思想を世界に向けて発信した人物だといった評価もされてきた。それに一理はあるとしても、そこには同時に誤解もつきまわっている。本日、私が紹介したいのは、むしろ岡倉覚三というひとりの歴史上の人物であり、その彼が近代のインドの知識人たちとどのように付き合っていたかという面である。じつはこの側面は、岡倉覚三についての研究のなかでも極めて遅れていた部分だと思われる。

1 岡倉天心とは

（1）岡倉覚三と英語

まず、岡倉に関する有名な話を紹介したい。彼は外国へ行っても「僕は若いときから和服で通してきた」と語っており、もっぱら和服を着て振る舞った。息子の一雄に対しても「英語に自信があるなら、和服で行くことを推奨する」と言っている。本日、ここに和服を着て来られた方は居られないようだが、外国で講演をするときに和服を着るのはなかなか効果がある。

ただ、一つ注意をしなければならないこととして、「英語がブロークンだったら、和服を着ることを推奨しない」と、岡倉は息子の一雄に対して警告している。これはどういう意味なのだろうか。まず一つは、和服を着れば当然ながら非常に目立つ。異様な風体をした人物が、公衆の門前で話をするとなると、きちんと相手側の土俵に乗ったルールで発言できなければならない。日本の外にでた覚三であれば、その場の共通語は、もちろん英語だった。



岡倉覚三（1863-1913）
／「岡倉天心アルバム」中村憲篇
茨木大学五浦美術研究所 2000年
表紙ラッパーより

岡倉は、声変わりをする前から、横浜でジェイムズ・バラについて英語を学んだ。そのように英才教育で早くから英語に接していたうえに、1860～70年代の横浜は海外からも多くの外国人が来ており、岡倉は商人だった父親の手

伝いで、子どものときから実地で英語を使うという環境にあった。したがって、現在、我々が置かれている英語の環境とはかなり違っていたことを考慮しておく必要がある。

我々は岡倉のことを「英語大名人」のひとりと呼び習わしているが、明治時代の日本の英語大名人と言えば、普通は3人の名前が挙がる。

一人はクラーク博士について学んだ内村鑑三で、キリスト教徒になっている。彼は著書の『余は如何にして基督信徒となりし乎』 *How I Became a Christian* において、異国から来たアジア人の青年がキリスト教徒になった経緯について、アメリカ流の自由な英語で「どうして僕はキリスト教徒になったのか」と開けっ広げの告白をしている。

二人目は『武士道』という本を書いた新渡戸稲造である。彼は肖像画が紙幣にもなっているが、国際連盟事務次長という要職にも就いていた。『武士道』は、今も日本の書店にバイリンガル版が出ているが、必ずしも英語圏でそのまま生き残っているというわけではない。

そして、三人目が岡倉覚三になる。今でも主要な著作が英語圏でそのまま読まれていて、英米の書店から出版されている人物となると、これは岡倉しか残っていない。岡倉といえば”Asia is One”が著名で、手書きの草稿には“We are one”という題名も見えるが、これはインドで執筆された岡倉の自筆の原稿の一部である。これについては後ほど説明を加えたい。

(2) 3冊の著作

岡倉という人は英語が大変上手くて、国際人として活躍したと述べた。確かに我々はそのような認識をもってしまっていると思う。しかし、私はこれ自体が少し間違った認識ではないかと疑っている。岡倉はもちろんネイティブとしては日本語を話していたが、日本語の著書はない。英語では生涯に3冊の本を出しているのだから、じつは彼は英語作家であったと言えるのではないか。

そうであれば、当時、大英帝国が世界中に植民地を広げ、北米の合州国が新興国として次第に重きをなしていったなかで、英語で発言をした非ヨーロッパ人にどういう人たちがいたのか、その文脈のなかに岡倉という人を置いてみたい。

じつは岡倉が言った“We are one”の“We”は、インドにいる知識人たちに対して「君たちも僕たちも一緒」「僕たちはひとつ」と伝えるためのメッセージであった。当然、これには共通の言葉である英語を使わなければならない。つまり、ここでは「支配的な言葉」としての英語というよりも、むしろ植民地で「共通語」として必要であった英語を手段として、岡倉という日本人がインドの知識人たちと意見を交換していた、という見方も必要ではないかと思う。

そこでまず、ごく概略ではあるが、岡倉の履歴をたどってみたい。1863年生まれの岡倉覚三は1913年に亡くなったので、数年前に生誕100年を迎えており、その前後にかなりの出版物が出ている。そのなかの一つとして『別冊太陽』に私が書いた内容から、簡単に紹介したい。

岡倉は東京大学の予備門に入ったが、当時、一緒に英語を学んでいた人は10人ほどしかいなかった。文学部を卒業した後、岡倉は役人になるが、28歳という、今では考えられない若さで新しくできた東京美術学校の校長に就任する。官吏としては、それから8年後の36歳のときに、美術学校の校長のみならず、帝国博物館の美術部長という職に就いている。

ところが、岡倉はそれらを辞職せざるを得なくなる。インドに最初に旅行をしたのは1901年末、日本における公職から退いた直後であった。じつは、岡倉は上司であり、後に文部大臣となる九鬼隆一の妻の波津子と恋愛関係になり、それがスキャンダルに仕立てられてしまう。そのことから中傷の怪文書が流され、公職から退かなくてはならなくなった。そのため、一種の逃避行としてインドに行ったという解釈が多くなされている。しかし、私はこの解釈に必ずしも賛成できない。むしろ、インドに行くことに極めて積極的な意図があったと考えている。

さらに年譜によると、インドでほぼ1年を過ごす、帰国後すぐに折り返して、横山大観、菱田春草という弟子たちをインドに派遣している。その間に、岡倉がインドで原稿を仕上げていた『東洋の理想』という英語の本が出版されている。その後、41歳～44歳の足掛け3年ほどで、岡倉は3冊の英語の本を出版している。それらを通読すると、およそ当時の日本の知識人がヨーロッパ世界、そして欧米の世界と対峙したときに経験して語るべきすべての話題を、岡倉はわずか3年間で走破したと考えざるを得ない。

1904年、42歳のとき、岡倉はボストンに滞在していたが、それは日露戦争の真っ最中のことだった。じつは天心が横浜から北米に向けて船出をした日は、仁川(インチョン)沖で日本とロシアの最初の海戦が行われた日であり、その日の夕方、日本はロシアに対して宣戦布告した。たまたま横浜港には、当時首相であった伊藤博文が自分の娘婿の船出を見送るために来ていて、その船上で演説を一席ぶったという記録が残っている。つまり、今から日本はロシアという大国を相手に戦争をしなければならないし、その雲行きもどうなるかまだわからない。そういうときに岡倉は太平洋を渡ったわけであり、そして、渡航先のアメリカ合衆国で出版したのが『日本の覚醒』という本だった。

その後、岡倉はボストン美術館の東洋部の責任者あるいは顧問格になるが、1905年に日露戦争が終わり、その直後に『茶の本』を書いている。

本日は、この3冊がどういう意味をもつかということも見ていきたい。思想史の立場では「この3冊の間で岡倉の発言は矛盾だらけだ」などとも指摘されているが、その「矛盾だらけ」という通説は果たして正しい認識なのか、そのこともこれから検討したい。

(3) 岡倉と日本の美術

1913年に50歳で亡くなった岡倉の一生は、「人生50年」といわれた当時ならばとにかく、今の時代からすると極めて短く、濃い生涯だった。

26歳で東京美術学校の校長になった岡倉だが、この人物にはなかなか演劇じみた才能もあって、自分でデザインした不思議な服装をして愛馬に跨った写真が残されており、靴はア

ザラシの皮でできていたそうである。学生にも同じような制服を誂えており、何かの儀式があると、東京美術学校の連中は皆この制服で出るので大変目立ったという。目立っても恥ずかしくない行動をとれる、そういう自信に溢れた人物であったことも間違いない。

当時の美術学校はできたばかりだった。我々はつい忘れがちだが、1890年に東京美術学校が設立されたということは、それ以降は公に認められた画家、美術家などが制度的に輩出されることになったわけであり、隣の音楽学校からは、音楽家も生まれることになった。逆に言えば、こうした学校を卒業した人で



明治30年代の東京美術学校全景

なければ社会的に「藝術家」という地位に就くことはできなくなる。そうすると、たとえば浮世絵師のような人たちは、それまで職人と同じような生活をして、絵を描くことで生計を立てていたが、そうした時代とは社会状況が大きく変わることになる。その新しい時代の幕開けを告げる最初の学校の校長を岡倉が務めたわけである。

その第一回生として入ってきたのが、横山大観の世代。横山大観は《屈原》という作品を描いているが、屈原は汨羅(べきら)の淵に身を投げて死んだ有名な中国の詩人、政治家である。恵まれない境遇に追い込まれ、祖国の将来に絶望して自殺を遂げなければならなかった屈原だが、横山大観は明らかにその屈原に、野に追われた岡倉の姿を重ねている。



L'Histoire de l'art du Japon
(1900)

この1900年頃に何が起きたのか。文化史のうえで、ひとつ非常に大切なことが起こっている。1900年はパリで万国博覧会があった年であり、その機会に、日本政府は文化事業として、日本には立派な美術の歴史があることを世界に向けて伝えようとした。その一環として、日本政府の事業で『日本美術史』という本をフランス語で編纂している。まず、フランス語で世界に対して、日本には美術というものがきちんとあることを見せようとしたわけである。じつは、岡倉はこの編纂の初期段階でこの著作物に関与している。ただ、東京美術学校で起きたスキャンダルも関係しているのか、岡倉は実際にはこの編集にほとんど携わることなく、職を解かれている。

しかし、その『日本美術史』のなかで日本美術がどのように描かれていたかを見ると、そこは岡倉の存在を無視できない。本日の「ゲーテの会」は哲学カフェであり、厳密に哲学と言った場合、そこに岡倉の業績が入るかどうかは分からないが、どのように日本の美術史を描いていくかという構想の裏には、確かに岡倉の哲学が反映されており、そしてそれは、少なくとも日本国内において、それまで類例がなかったはずである。

この1900年に作られた日本で最初の公式の美術史の本は、日本語ではなく、フランス語で刊行された。もちろん日本語の原稿をフランス語に訳したわけだが、そこで主張されたのは、仏教美術の精華というべき傑作が6世紀～7世紀の古代日本(敢えて「古代」と言う)にはすでに存在していた、という認識である。「そんなことは当たり前ではないか」と我々は思うが、そのように我々が教科書で学んだ日本美術史は、じつはこの著作物に由来するものと言える。そして、現在でも必ず日本史の教科書の最初のあたりに出てくる法隆寺が、なぜ日本美術の最初の仏教藝術の傑作として出ているのか、その起源もこの編纂物の周辺にある。先ほど触れた仏文の『日本美術史』という著作物のなかには法隆寺の金堂が写真版で入っているが、日本では北魏の様式をもった6世紀の金銅の釈迦三尊が今に至るまで伝えられ、しかも法隆寺は遺跡ではなく、今でも生きた寺として機能していることが紹介されている。そして、これも我々には常識だが、その金堂にある壁画も、さすがに実物をパリに持って行くことはできなかったものの、1900年当時、写真版によってフランスを始めとする諸外国の公衆にも知られるようになる。



法隆寺 金堂/
L'Histoire de l'art du Japon (1900)

19世紀後半のヨーロッパにおいては、江戸時代以降の日本美術が流行しており、北斎などは大変高く評価されていた。ところが、北斎の錦絵版画は言わば複製芸術であり、必ずしもハイカルチャー、ハイアートと見なされるものではなかった。その一方で、ギリシャ、ローマの古典に匹敵するような仏教美術の成果は、まだ欧州では知られておらず、しかも残念なことに「東洋古代」の精華はインドでも中国でもあらかた失われてしまっていた。それが日本では損なわれずに現存していたので、日本こそは「東洋文明の生きた保存庫であり、博物館である」という発想が、岡倉の周辺から提唱されるに至るわけである。

ここで伏線として述べておくと、当時から複製画を作ることが岡倉の周辺では進められていた。たとえば、法隆寺金堂壁画は1949年の火災で甚大な損傷を被り、現在では、わずかに火災以前の写真が面影を伝えるのみだが、明治時代の桜井香雲という画家による模写が残っている。もう少し後の時代では、8世紀初めの東大寺建立がある。ここには唐代の中国の影響が顕著に表れており、唐代の遺構がまだ日本には無事に残っていることを証明している。日本にはそうした貴重な歴史的遺品があり、それらの遺品の模作も東京美術学校で盛んに作られるようになっていた。ヨーロッパの美術学校では、ギリシャ・ローマ時代の彫刻のレプリカが作られ、広く教育に役立てられていた。それと同じことを日本でもしなければならぬという発想が、すでに19世紀末、美術学校の発足とともに日本にも根付いたことが理解できる。

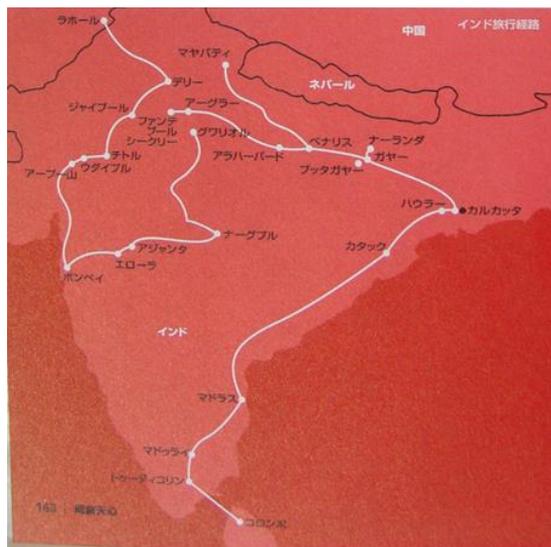
II インドへの旅

(1) ヴィヴェーカーナンダとの触発

そういう事業に若き岡倉校長は取り掛かったわけだが、その岡倉の下には外国からも多くの人が次々と訪れていた。たとえば、ジョセフィン・マクラウドはニューヨークの大金持ちの娘で、世界中を船で回っていたが、「東京に岡倉という人がいて、日本の美術についておもしろい講義をしてくれるらしい」と聞きつけ、谷中の岡倉を訪ね、そこで美術の講義を受けている。それだけではなく、彼女は織田得能という岡倉が親しくしていた東本願寺系列に属する寺の僧侶の家にも上がり込んで、皆で歓談している。そのような裕福なアメリカ人が岡倉の所に来て、岡倉にインド行きを勧めることになる。

彼女が来日したのは 1901 年とされるが、その年の暮れの 12 月には、マクラウドは岡倉を伴ってインドに行く。コロombo に到着し、インド亜大陸を北へ移動して、コルカタ郊外のハウラーというところへ向かう。そこは近代におけるヒンディズム再興、ヒンドゥー教を刷新しようという運動の一つの中心地であり、そこに行くのが岡倉たちの最初の目的だった。

余談になるが、コロombo はヨーロッパに行く船が必ず停泊した場所で、日本から客が来ると必ず連れていく「ハーキム商会」という土産物屋があった。その主人は 3 代続けて日本客専門で営業しており、20 世紀になっても、日本から留学する人たちは必ず同じルートでこの店に来て買い物をし、それからヨーロッパへの旅程を継続する。したがって、ハーキム商会は一種の定点観測地になっていた。これには橋本順光さんに充実した研究があるが、ここで何が行われたかを年代を跨いで見ていくと、大変おもしろい。たとえば、コロombo を日本のどのような知識人がいつ通過して、何をしたか、それを調べるだけで日本の近代文化交流史、欧州航路の文化史が書けてしまうほどである。



インド旅行経路／ワタリウム美術館（責任編著）
『岡倉天心 日本文化と世界戦略』平凡社 2005 年

岡倉たちが目指していたベルールマトは、今では立派な、そして些か不思議な寺院が建っているが、岡倉が行ったときにはまだそのような立派な寺院はなかった。じつは、その礎を固めた人に会うことが、岡倉のインド巡礼の大きな目的の一つだった。その人はスワミ・ヴィヴェーカーナンダという人で（「スワミ」は尊号。ベンガル語は日本語と同じく B と V の発音の区別がないので「ビベカノンド」くらいの発音になる）、1893 年のシカゴ万国博覧会に併せて開催された世界宗教議会で、一躍有名になった人物である。この世界宗教議会は、もちろんキリスト教の人たちが音頭をとった会議だったが、日本からも最上位の僧侶ら 4～5 人が参加しており、神道の関係者も参加していた。そのなかでまだ 30 歳になるかならな



スワミ・ヴィヴェーカーナンダ
(1863–1902) Ramakrishna
Mission Delhi, Public domain,
via Wikimedia Commons

いかくらのヴィヴェーカーナンダがこの会合で演説を打ち、一躍大スターになったのである。

その人に前述のマクラウド女史は入れあげていて、こうしたインドの素晴らしい聖人、宗教指導者に皈依していたなかで岡倉に会い、岡倉なら絶対にヴィヴェーカーナンダと気が合うと感じて、一緒にインドへ行こうという話になったようである。こうした僥倖は、もはや現代では容易には起こらないかもしれない。そして、岡倉はそうした機会に物怖じせず乗っていくような人でもあった。もう一つ言うと、じつはアジアの知識人たちを物心両面から支えていたのが、マクラウドのような富豪の娘など白人女性たちで、そこには「女性の力」が裏で働いていた。これも歴史のメカニズムとして忘れてはなるまい。

こうしてベルールマトで岡倉はヴィヴェーカーナンダと対面する。その折の手紙が残っているが、そこには「(前略) 過般来当地に参りビベカノンド師に面会致し候 師は気魄学識超然拔群一代の名士と相見へ五天到处師を敬慕せざるはなし」と書かれている。短い手紙だが、岡倉はこのような文章をさらさらと書けてしまう。

先ほど英語名人と紹介したが、じつは岡倉という人物は漢詩を作るのも大変に上手かった。当時の東京大学では、中村正直が英語も教えていたが、漢文購読もなされていたようである。当時、まだ16歳だった岡倉少年は、漢文の素読をさせるとよく間違えていたが、漢詩を作らせると非常に上手かったので、中村正直は“*What a contrast!*”と驚嘆したと言われている。春秋左氏伝の読みは間違えるが、漢詩を作らせたなら天才肌だったわけである。後に東京大学文化大学の学長になる井上哲次郎は、漢詩を作ることにかけては当代一で、岡倉より5歳ほど上だったが、その井上哲次郎も「岡倉は漢詩を作らせると、凄かった」と晩年に回想を残している。そうした漢文の素養は、岡倉がインドから織田得能に宛てた書簡の「師は気魄学識超然拔群一代の名士と合見へ五天到处師を敬慕せざるはなし」という文面にも現れていると思う。同時に岡倉は、初対面の人物を観察して、すぐさまこうした文章を書ける人でもあったことがわかる。

さて、岡倉とヴィヴェーカーナンダは、早速、宗教問答とでも言うような哲学的な議論を交わしたようである。これについて岡倉は同じ書簡に「而して師は大乗を以て小乗に先んじたるものと論じ目下印度教は仏教より伝承せる事を説き釈尊を以て印度未曾有の教主となせり。師は又英仏語を能くし泰西最近の学理にも通じ東西を湊合して不二法門を説破す」と書いている。「師は大乗を以て小乗に先んじたるものと論じ」は、歴史的に言うとも必ずしも正しくないが、教義として大乗の方が大切だとの認識であり、岡倉自身の考えも同じだった。これが第1点。それから2点目は「東西を湊合して不二法門を説破す」というところで、英文の「不二法門」=Advaitaはaが否定詞、dvaitaが二股に分かれるという意味なので、二

つに分かれない、つまり真理への道は一つであるという信念を意味し、ヴィヴェーカーナンダは宗教において東と西の別はないと説いている。これも大切な教説だが、岡倉は同様の思想を、不二真教を唱えた丸山貫長のもとですでに吸収していた。そうした二つの論点がヴィヴェーカーナンダとの面会で確認されたことが、岡倉のこの書簡には簡潔に述べられている。

前述のように、これは岡倉がベルールマトから織田得能に宛てた書簡であり、その二つの点の確認を受けて、初対面の覚三とヴィヴェーカーナンダの間では議論が弾んだものと思われる。実際これに続けて「議論風発古大論師の面目あり 実に得難き人物と存候 出来得べくんば小生帰朝の際の同伴可致考に候 (下略)」と書いている。なぜこのようなことを織田得能に向けて書いたのか。じつはこの後、織田得能は次の船に乗ってベルールマトに来ることになっていたのである。彼らはシカゴで開催された1893年の宗教会議の後を受けて、2度目の宗教会議を日本で開きたいと考えており、その際には是非ともヴィヴェーカーナンダを日本に招こうと、出演交渉をする算段であった。してみると、どうもインドに行く前から、織田や岡倉にはそうした計画が胚胎していたようにも思われる。

(2) ニヴェーディターの存在

ところが、この話は一般にはほとんど知られていない。それは、残念ながら第2回の宗教会議が失敗に終わってしまったためである。皮肉なもので、失敗に終わった事績は歴史の教科書に残らない。そのため、いかに実現に努力をかたむけても、計画のまま潰え去ってしまった事業は歴史には留まらず、結果として我々の常識からも抜け落ちてしまう。

ただ最近、岡本佳子さんら若い研究者たちが、どうしてこの宗教会議が失敗に終わったのか、その経緯について文献を発掘して研究し、論文を書いている。要約すれば、一番大きな理由は単純で、ヴィヴェーカーナンダが1902年7月14日に亡くなったためである。ベンガルでは風土病として糖尿病が多く、彼の場合も大変無理をして若いときから修行に勤しんだつけが回ってきたのか、まだ大変に若い30代末で亡くなってしまった。そのため、代りの人を探そうとしたが、上手くいかなかった。さらに金銭のもつれに、主導権争い、招いてもいないのにセイロンの僧侶が東京に来てしまうなど、大混乱が出来し、中傷記事も出て、計画はついに流れてしまった。そうした経緯が明らかになっている。また、その当時のインド側の事情は、堀至徳という、岡倉らがインドに派遣した僧侶が日記に記録して残している。

じつは、マクラウドや音楽家としても有名なオリ・ブル夫人、そしてヴィヴェーカーナンダと一緒に写っている写真があり、そのなかに、次に話したい人も登場している。それはニヴェーディターという女性で、ヴィヴェーカーナンダが亡くなった後、岡倉はそのニヴェーディターを代役にして日本に招こうと試みたことが、彼女の残した書簡から知られている。

ニヴェーディターという名前を耳にした方は、あま



左からマクラウド、オリ・ブル夫人、ヴィヴェーカーナンダ、ニヴェーディター



シスター・ニヴェーディター
(1867–1911) Public domain,
via Wikimedia Commons

り多くないかもしれない。だが、この人の著作の題名は目にしているはずである。じつは『茶の本』の最初に *The Web of Indian Life* という著書名が出ている。インドでの生活、あるいは人生について、(*Indian Life* における web の意味が訳し難いが) 織物の縦糸と横糸のように織りなされる生活の縦横が web のように「柔らかい布」というメタファーに託された本である。そして、岡倉は『茶の本』の該当箇所で、*The Web of Indian Life* を書いた「女性の筆者」と並べて、ラフカディオ・ハーンすなわち小泉八雲の名前を出している。この二人ほどアジアの心をきちんと理解できた外国人は他になく、またそうしたメッセージを英語で広く伝えてくれた人はきわめて少ない——。そのように岡倉は『茶の本』の冒頭に記している。

しかし、なぜそこにニヴェーディターの名前は明記されなかったのか。これは少し考える必要がある。岡倉の最初の著作である *The Ideals of the East*、我々はこれを『東洋の理想』と訳しているが、その序文は、ほかならぬ彼女が綴った文章だった。最近の文庫本ではこの序文が削られている場合が多いが、はっきり言ってこれには困る。初版本を見たがるのは学者の悪い癖だが、なぜそうするかというと、「どういう状況でこの本が出版され、どういう人々のネットワークによって出版に漕ぎ着けたのか」という事情がそこで窺えるからである。それが全集になると削られてしまう。これには注意しなければならない。

じつは、その序文には以下のようなことが書かれていた。ニヴェーディターは「岡倉氏のように」として、「アジアを、我々が想像してきたような地理的断片の寄せ集めとしてではなく、おのおのの部分が他のすべての部分に依存し、全体が単一の複合的な生命を息づいているひとつの統一された生ける有機体として示すこと」が必要だ、と述べている。岡倉が『東洋の理想』で、このようにアジアを「ひとつ」と把握していることは、とても価値のあることだ——そのようにニヴェーディターはこの序文で述べている。

ニヴェーディターという人は、元はマーガレット・エリザベス・ノーブルという名前のアイルランドの人である。当時のアイルランドはイギリスの圧政に虐げられていたと我々は認識しているが、言い換えればアイルランド自体が、インドと同様に大英帝国の植民地体制下に置かれていた。そこで育った彼女は、ヴィヴェーカーナンダに帰依し、1901年にコルカタに居を移したばかりだった。そしてヒンドゥー教に改宗して、ヴィヴェーカーナンダの傍でその世話をするようになった、そこに現れたのが岡倉覚三だった。

その彼女が、どうして岡倉の著作『東洋の理想』の序文を書いたのか。それは、岡倉がベルームに滞在した折に世話をしたのが、彼女だったからである。そして、彼女は岡倉が現地で書いていた草稿をとりまとめ、それを英国の出版社に渡すという編集の仕事に携わった。彼女の書簡集は上下2巻にわたる膨大なものであり、著作集も現在6巻物が出てい

る。これらを通読すると事情が少しずつ分かってくる。岡倉の原稿を編集者が勝手に改竄してしまったために、せっかくの岡倉の英文の音楽が滅茶苦茶になってしまった。「だから、私がそれをもう一度元に戻した」といった証言も出てくる。これはニヴェーディターが仲の良かったマクラウドに宛てた書簡に見える指摘である。

つまり、ここまでの経緯を要約すれば、マクラウドが岡倉をインドに連れて行って、彼女自身の一番親しかった友人であるニヴェーディターに岡倉を紹介し、その縁があって初めて『東洋の理想』という本が、今我々が知っているような形で出版されたのである。そうした事情をご理解いただけるだろう。

ただ、彼女は単なる編集者ではない。序文を見ても分かるように、彼女自身がインドの夜明け、目覚めに大変な関心を持っている一種の社会事業家であり、宗教者でもあった。

III インドに対するメッセージ

(1) 弟子のインド派遣が意味するもの

1902年にヴィヴェーカーナンダが亡くなった後、岡倉は日本に戻ってくる。第2回世界宗教会議は残念ながら実現せず、失敗に終わってしまうが、その裏で、彼は横山大観と菱田春草の二人の弟子をインドに派遣している。そこで、彼らの事績を見ながら、本日の話の第三部にすすみたい。

横山大観は前述のように美術学校の第1期生と言える人で、岡倉の下野とともに大学を去り、岡倉が創立した日本美術院に入る。そのため、美術学校の教員とはならないが、結局は世間的に一番出世した人物である。文人の才能があつて、英語も得意としたことが彼の利点だった。絵は同時代からはっきり言ってそれほど上手ではなかった、という世評を浴びていたが、大観という人には、政治家的な才覚とともに、知識人としての風格も備わっていた。

大観がインド滞在中に、ヒンドゥー教を奉じる民衆たちの信仰を題材に選んだことが知られている。描かれたのはカーリー女神。カーリー女神は漆黒の女性で、シャレコウベを束ねて首飾りにして、夫であるシヴァ神を踏み敷く、恐ろしい姿で知られており、創造とともに破壊の女神である。今なおベンガルでは、この女神を信仰する政治結社も存在する。これを横山大観は現地で描いた、とするスレンドロナート・タゴールらの証言がある。

しかし、これは横山にとって決して未知の体験ではなかったはずだ。じつは、彼は日本で似たような図像を見ていた。先ほど伏線として述べたように、東京美術学校で岡倉は古い仏画の模写を学生にさせており、大観が模写した作品には醍醐寺



伝・横山大観(1868-1957)筆
Indian Protective Divinity
(1903)《インド守護神》

の大元明王像があった。とすれば、インドに行って「密教の神様がインドではまだ生きており、信仰の対象になっている」という確信を横山大観が得たことは、疑いあるまい。そして、岡倉はもとよりそうした事情に通暁していたうえで、横山をインドに派遣したことも明らかだと思う。

岡倉自身、じつは密教に大変大きな興味を示している。岡倉にとっては、空海が存在が非常に重要で、このけいはんな学研都市からほど遠くないところにある真言宗の寺、宇陀の大蔵寺に、岡倉が寄進した「辦事堂」がまだ残っている。先に丸山貫長への帰依について触れたが、その岡倉と真言宗との関係が、こうしてインドを舞台にもう一度復活してくる。



横山大観《流燈》
(1909) 第3回文部省
美術展覧会出品
バナーラシ

なインド風の仏教画だが、これも当時、ヨーロッパ風の美術教育を受けた最初のインドの画家の一人であるラヴィ・ヴァルマが描いた宗教図像を、日本の画家が目にすることで実現したという経緯が窺える。

もちろん、大観たちのもう一つの目標は、仏教の誕生の地であるインドを自分の目で確かめ、自分たちの手でもう一度そこに仏画の原風景をつくり直すという事業だった。とりわけブッタガヤの聖地が完全に荒れ果てていたので、そこを巡礼地として再建するという取組みにも岡倉は関与していた。外川昌彦さんがベンガル語を含む行政訴訟資料も発掘して解明されたとおり、この企ても残念ながら上首尾には進まなかったが、岡倉はインドでそうした活動にも手を染めていた。その岡倉の意を酌んだ横山大観は、バナーラシの、死者を火葬して土に戻し、ガンジス川に流すガートの風習をテーマにした作品も残している。横山の代表作として知られるが、これもインド体験なくしては成立しなかった傑作である。

もう一人の菱田春草がインド滞在中に描いたとされる作品に、サラスヴァティー、日本で言えば弁財天の図像が知られる。女神が手にする楽器はインドでヴィーナと呼ばれるもので、これから琵琶が派生する。舞台は睡蓮の花が咲き誇る池、そん



菱田春草 (1874-1911)
《弁才天》(サラスヴァティー)

(2) インドのアイデンティティを守る

① ラビンドラナート・タゴールとの出会い

この横山大観と菱田春草の二人をインド側で迎え入れてくれたのが、ラビンドラナート・タゴールである。タゴールは1913年にアジア人として最初にノーベル文学賞を受賞することとなる偉人で、日本にも何度も来ている。そのタゴールと岡倉は、1902年に岡倉がイン

ドに行ったときに会っているが、その人間関係、友人関係から、実にいろいろな出来事が発展していく。岡倉はそうした一連の事績の鍵をなす発火点でもあった。登場人物が多くなったが、それだけ岡倉がインドで一流の人たちに会う機会を得たと言えるだろう。

当時のタゴール家一族の人間関係を描いたカリカチュアがある。当主である詩人のラビンドラナート・タゴールとその眷属たちの他、横山大観らと一緒に絵を描いていた画家で、日本にも滞在することとなるノンダラル・ボスや、当時このサークルに出入りしていたクーマラスワミーというスリランカ出身の美術史家が登場する。これらは岡倉がコルカタのタゴール邸で大変親しくしたサークルの人たちで、岡倉が創設した日本美術院、弟子の芸術家たちが集っていたサークルとも、この先、密接なつながりを持つこととなる。



ラビンドラナート・タゴール (1861-1941)
Public domain,
via Wikimedia Commons

② ハベルの主張と岡倉のメッセージ



Nandalal Bose (1883-1966) *Studio in Jorasanko*
Top left: Sn. Tagor; right: An. Tagor,
Middle left: A.K. Coomaraswamy, right: Gn.
Tagor; Bottom right: Nl. Bose

そのクーマラスワミーの事績や、ノンダラル・ボスという画家の作品を見ながら、次の話題へと移りたい。

この人たちの後ろにもう一人重要な人がいる。アーネスト・ビンフィールド・ハベルという、当時、コルカタの美術工芸学校の校長をしていた人物である。彼は植民地側のイギリス人であったにも関わらず、インドにおける国民的な美術を大いに推奨し、それを進める宣伝役を担った。彼には *Indian Sculpture and Painting* や *Indian*



アーネスト・ビンフィールド・ハベル (1861-1934)

Architecture といった著作もあるが、1911年に刊行された *The Ideals of Indian Arts* は「インド美術の理想」ということで、この“the ideals”が岡倉の『東洋の理想』の「理想」から来ているのは明らかである。

つまり、岡倉の英文の著作は日本人向けに書かれたわけではなく、むしろ、インドのインテリたち、そしてインドで文化事業を進めようとしていた植民地官僚たちに、良い意味で影響を与えていたことが、ここに明らかに見てとれる。

一つだけ話題を紹介すると、当時、クーマラスワミーやハベルは、ガンダーラの仏像を「ギリシャの真似をしているだけであって、インド本来の美からはかけ離れている」と否定的に評価していた。そして、非ヨーロッパ的な、ヨーロッパの影響が入っていないものこそがじつは「まっとうなインド」の造形なのだと主張した。ハベルの著書はそのマニフェストだっ

た。彼らの民族主義的な価値判断に従えば、我々が親しんでいるガンダーラの仏たちは、言わばギリシャとの混交の結果でしかなく、したがって美的な価値も劣る、という評価となる。

これはかなり極端な見解だが、なぜそういう主張が出てきたかという、じつはその裏側に当時の政治的な状況があった。1905年からその後にかけて、ベンガル分割令が施行されようとしていた。つまり、大英帝国側は自分たちの統治の都合で、インドを分割する施策をとろうとしていたのである。そのなかで、「インドの文明は一つ」と主張する国民主義的な運動、いわゆるスワデシ運動が高まっていく。岡倉がカルカッタに到着した頃は、まさにそうした運動が始まろうとする時期だった。ここで分かりださうと思うが、冒頭で紹介した“*We are one*”「我らはひとつ」という標語は、ガンダーラ仏を否定し、古代ギリシャ、つまりヨーロッパの影響が入っていない仏様こそ純正なインドの正しい表現だと主張する、美術史上の政治的な論争が行われていたその文脈のなかで、岡倉が書いた文章だった。

この“*We are one*”は、じつは我々が知っているテキストである。岡倉はボストンで1904年に『日本の覚醒』を書く以前、インド滞在中の1902年に『東洋の覚醒』となる書物の原稿も書いており、我々はその和訳を知っている。ただし、このテキストは岡倉の生前には出版されなかった。それどころか、ニヴェーディターはその草稿を見て、マクラウドに宛てて「こんなものが発刊されたら、私たちは皆、監獄行きです」と告白している。つまり、当時、これは扇動文書として、到底、英語で出版できるようなものではない、過激なる政治文書だったわけである。それこそ、我々が今知っている『東洋の覚醒』という文書にほかならない。

しかしながら、この『東洋の覚醒』という題名も、岡倉がつけたものではない。岡倉の没後四半世紀を経て草稿が再発見され、1939年に日本語に訳されたときに『東洋の覚醒』との題名が付され、それが1940年に英語で *The Awakening of the East* と名づけられたものである。その出版に岡倉自身は関与していない。1902年段階と推定される岡倉自身の原稿には“*We are one*”と仮の題名案が記されていた。つまり、ベンガル分割令が施行されようとしていたなかで、インドのインテリたちに対して、「インドの国が分裂させられようとしているが、インドは一つである」と、日本人として賛同と連帯のエールを送ったのが、この檄文だった。それが“*Asia is one*”さらに“*We are one*”という言葉に元来込められていたメッセージだったはずである。

③ インドの象徴と日本の技法

アバニンドラナート・タゴールは詩人タゴールの甥にあたるが、タゴール一族は大家族で家族関係も錯綜している。その彼がある小さな作品を描いている。それは《母なるインド》を象徴する絵で、インドの教科書に必ず載っているほど大切にされている。具体的には、手が4本ある女性像であり、上の右手に持っている布は衣類を示し、下の左手に持っている野菜は日々の食糧を表している。下の右手には数珠を持っているが、これは信仰を表し、上の左手は文字の書かれたものを持って、教育を寓意している。この四つによって、インド女性の理想像を象徴し、アバニンドラナートはインドの新しい再生、インディアン・ルネッサ

ンス、あるいは当時言われていたベンガル・ルネッサンスの旗手となった。

じつは、この絵には日本の影響=感化がある。一つは wash と言われる水彩の技法で、水彩絵具で描いたものを洗面器の水に浸けて色を落とし、その上からまた絵を重ねて描く。その背後には、菱田春草や横山大観が当時試みていた朦朧体があるが、これはそもそも岡倉が大観や春草に工夫するように論じていた技法上の革新だった。それを横山たちがインドで実演してみせ、それに触発されたアバニンドラナートたちが開発した新技法こそ、wash すなわち「水洗」という技法だったのである。

さらに、先ほど菱田春草の作例を紹介したが、睡蓮の池の上にいるサラスヴァティー=弁財天も下敷きになって、それが《母なるインド》の形象へと発展していったことが見てとれる。《母なるインド》もまた、睡蓮の池のうえに佇んでいるのだから。ニヴェーディターはその美術評論のなかで、この理想の《母なるインド》が、かの暗黒のカーリー女神の表裏となすもの、一方のネガに対するポジの姿であることも、教義に照らして説明している。



アバニンドラナート・タゴール (1871-1951) 《バーラト・マータ》 (1905-6)

(3) 岡倉天心が残したもの

ここで本日のお話をまとめよう。まず、岡倉がインドに行き、彼の地の知識人たちと広い交際を持ったことによって、初めて岡倉の英文の著作が世に出た。同時に、彼がインドに派遣した菱田春草や横山大観らは、インドの美術における近代化に直接貢献しただけではなく、大英帝国の支配下で、いかにインドのアイデンティティを確保し、それを再生させていくかという、ベンガルのルネッサンス運動にも関与していた。不思議なことに、そういう事実は「日本美術史」に関する我々の常識のなかでは、あまりに知られていない。さらに、天心・岡倉覚三の思想史的位置づけに関する議論を聞いても、岡倉がインドにおいて撒いた種がインド知性史に果たした役割については、日本ではほとんど問題にされてこなかった。

私の年齢ではもはや自分で実現することはできないが、次世代の若い研究者のなかには、日本人でもベンガル語を学んでいる方が多い。またインドの若い研究者も多数日本に来られている。そうした方々のあいだで、また新しい研究への扉が開かれていくものと期待している。そのきっかけとなる部分まで、本日は話をさせていただいた。ここで一旦、私の話を終わらせていただきたいと思います。

質疑応答

- Q1 カースト制度について、岡倉天心は何を感じたのか
- Q2 岡倉は「東洋」の概念をどのように捉えていたのか、東洋における共同体は可能か
- Q3 岡倉は中国や朝鮮をどのように捉えていたのか
- Q4 ビゲローやボースにどのような影響を与えたのか

Q1 カースト制度について、岡倉天心は何を感じたのか

インドにはカースト制度という身分制があるが、それについて岡倉天心は何を感じていたのか

(稲賀)

ニヴェーディターと岡倉の交際については十分に話せなかったが、じつはカースト制度について彼女と岡倉は議論をしている。岡倉は『東洋の理想』のなかでもカースト制度について触れており、それによると、それぞれの民がそれぞれの職分を守って社会に貢献をしている姿は、労働運動があるヨーロッパとは違うというような発言がみえる。これについては、岡倉の自分勝手な東洋身分社会の理想化、合理化だと批判されることも多いが、じつはそれはニヴェーディターとのやり取りを自著で復唱しているに等しく、双方の間でカースト制や為政者と民衆との関係について、西欧世界と東洋との得失を比較する議論の応酬があったことは、ニヴェーディターのマクラウド宛書簡からも明らかである。

そのニヴェーディターのインドでの公衆への発言を確認してみると、彼女は元々アイルランド出身なので「偉そうに称賛される英国社会も、実際には熾烈な階級社会ではないか」という思いが裏にあったのは明白である。その上で、社会闘争が起きてしまう世紀末のイギリスやヨーロッパに比べて、インド社会においてこそ理想が実現されている、と彼女は訴えている。彼女がインドに来たのもそれゆえだった、という背景がある。そう考えると、まだ他の誰も指摘していないと思うが、岡倉の『東洋の理想』にいささか唐突に、「東洋では女性の地位が低いように見られているのは、ヨーロッパ流の偏見だ」というような見解が出て来る理由にも合点がいく、と私は考えている。じつはここには、ニヴェーディターとのやり取りのなかで岡倉が思い至った確信が、正直に述べられていたのではないかと思う。

もちろん二人ともインドあるいは東洋を過度に理想化しようとしている傾きは否定できない。またこの点を批判する社会思想研究者も多い。だが、その裏には植民地状況にあるインドの社会改革への取り組みについて、宗教的な背景も控えている。単純に言えば、キリスト教宣教師とヒンズー思想肯定論者との対立である。

ここでカースト制度について簡単に触れると、インドでは人の名前を見たら、その人がどのような職業に就いているか、どの社会階層の人かすぐに分かるようになっている。そして、そのように階層と社会での役割が分化した人たちが集まらないと成り立たないような社会

の仕組みができています。平たく言えば、インドの有力者は裕福であれば、当然運転手はいるし、食事を作る調理人もいるし、家政婦もいる。しかし、そこで雇われている使用人たちは虐げられているわけではなく、さまざまな役割を担う人たちが一緒に働くことで、初めて社会は上手く回っている。これを外から観察して「不平等であり宜しくない」と見る批判も当時からあったが、ニヴェーディターはインドの社会を内側から理解しており、外来のキリスト教の社会改革派のように「インドはこのままでは封建制で困るから、改宗させねばならない」という立場には同意していない。

カースト制度の是非については、今なおインド社会において論争が続いており、どちらが良いのか、決着はついていない。「女性開放」の訴えは欧米社会への追従となりかねず、インド至上主義は近代化の拒絶と同一視されかねない。この難問は今日の第三世界フェミニスト論争につながる論点だが、こうした問題の所在を、岡倉覚三は早くも20世紀初頭のインドで、ニヴェーディターというヒンドゥー教に改宗した白人女性を通して観察していた。

Q2 岡倉は「東洋」の概念をどのように捉えていたのか、東洋における共同体は可能か

我々は、西洋に対立するものとして東洋という言葉を使っているが、井筒俊彦などは東洋という言葉を漠然としたものとして使っているような気がする。岡倉天心は東洋をどのような考え方で捉えていたのか。それから、東洋という概念には日本の他にもいろんな国が含まれると思うが、そこにはどのような共通基盤があるのか。そしてそれは将来、今日のヨーロッパ共同体のように、東洋における共同体に発展していく可能性があるのか。

(稲賀)

大変大きな問題で、今の質問だけでも五つぐらいに分けないとお答えできないと思う。

井筒俊彦氏の場合、東洋の定義は容易にはできない。ただ、井筒先生がテヘランを離れた頃の雰囲気では、向こうでイランの人たちと話をすると「お前も東洋人だろう。俺も東洋人だ」という認識があり、そういう意味ではトルコが一応の境界になるだろう。しかし、これは意識の問題であり、地理的にどこからが東洋なのかと線引きするには無理がある。それこそモロッコなどはイタリアより西にあるが、「東洋」と目されたりする。イスラームは信仰の問題であり、地理的、領土的な「東洋」としては定義できない。

二つ目の問題は「意識としての東洋」だが、これは井筒俊彦氏も言っているように、彼の東洋哲学に沿えば、欧州はユーラシア大陸の一番西の端のキャップであり、岬の先の先である。しかし、一番辺境にあるイギリスの島国からたまたま石炭が採れて鉄が供給されたことにより、産業革命が始まった。そのため大英帝国を西側世界の中心と見れば、そうではない部分はすべて東側になる。the West and the Rest = 西側世界との残余という分類も知られる。これは地理的な区分けというよりも、当事者の意識に左右され、さらに政治史の認識によって決定されると同時に、時代とともに変わっていく。たとえば、南アメリカ世界を見ると、コロニアに入植して支配層となる人たちには白人が多い。しかし、ブラジルの社会は混血が複雑に進行しており、先祖を辿ると先住民やアフリカから運ばれてきた奴隷の子孫も多い。

そうなる、この人たちに対して「東洋」か「西洋」かを問うても、所詮はおかしな話となる。

そのうえで第三に「アジアにおける連帯」を唱えるとなると、かつての「第三世界論」のように、非西欧世界は団結しよう、といった政治的な動きも発生する。ただし岡倉も自覚したとおり、アジアには言語としての共通語がない。そこで彼は逆説を弄して、『東洋の理想』の最初の段落で「ヒマラヤで分け隔てられているけれど、それでもアジアはひとつだ」と無理なことを主張した。当時の文脈で言うと、西洋側が植民地を拡大するなかで、その圧力の下に屈したり、それに抵抗したりしている国や地域を、彼はまとめて「東洋」と規定した。

ところが第四に、岡倉はこの主張から数年後には「変節」せざるを得なくなってしまう。つまり、日露戦争に勝ってしまうと、日本は西側の列強の一国に「昇格」してしまい、もはやインドとの連帯など、岡倉自身も主張できない立場に置かれてしまう。そのため、日本が否応なく「変節」してしまった後で、居直って書いたのが『茶の本』ではないかというのが、稲賀の解釈である。このように、岡倉の人生のなかでも「東洋」の意識は極めて大きく揺らいでいる。しかし、それは彼が置かれた歴史的、社会的な状況を見れば極めてよく分かることであり、それを岡倉個人の「変節」あるいは不定見と見るのは誤謬だろう。むしろ、こうした曲折からは、彼がそういう変動の時代を生きただった、ということが明晰に見えてくると思う。

そのように考えると第五に、「東洋の連帯」に安易に与することも難しくなる。日露戦争で日本が「勝利」すると、トルコだけではなく、エジプトでもインドでも「日本を見倣え」「日の出る帝国は素晴らしい」という評価がなされた。『日本の覚醒』の岡倉は、その意味でお先棒を担ぎ、自らも担がれてしまったわけだが、それが幻影でしかないことを、彼は1906年の『茶の本』の段階で十分に自覚していたはずである。なぜならば、岡倉は『茶の本』の冒頭近くでこう述べていた。「一般の西洋人は、茶の湯を見て、東洋の珍奇、稚気をなしている千百の奇癖のまたひとつの例に過ぎないと思って、密かに笑っているであろう。西洋人は、日本が平和な文藝にふけていた間は、野蛮国と見なしていた。ところが満洲の戦場に大々的な殺戮を行ない始めると、日本を文明国と呼んでいる」と。

この一節をどう解釈するかにはさまざまな説があり、岡倉の居直りや知的不誠実を詰る見解も多い。だが、私はここに岡倉の正直な慨嘆を読んでよいと考える。つまり、ヨーロッパから認められるような、アジアの覇権を握る存在になったときに、日本はもはやアジアの一員としての資格を失ってしまったという自覚が痛切に披瀝されている。そうした逆説を岡倉は十分に意識して、その蹉跌をボストンの親友たちにまず「茶」を題材に語りかけたのではないかと思う。

ロバート・ヘリヤー氏が研究している「茶の戦争」の背景には、英国産の紅茶と日本産の輸出品の茶とが、北米の市場で競い合っていた状況がある。とすれば、インドと日本と、どちらが東洋を代表し、どちらが脱亜入欧なのか、といった思想史的発想そのものが、商業戦線の現実には対応しておらず、すでに極めて危険だというのが、私の取り敢えずの今の認識である。そのうえで『茶の本』については、それまでは『東洋の理想』で仏教美術にしてもヨーロッパに対抗できる文化遺産が日本に存在することを懸命に誇示しようとしていた岡

倉が、「お茶碗という空っぽの容器」として、cup of tea を cup of humanity と語呂合わせして語っている。これは駄洒落である。tea と humanity とを脚韻で詩的に掛けて、空っぽの入れ物のなかに一番良いものがある、茶室だって空っぽだから良いという道教的な逆説を、まずはボストンの上級階級を相手に説き始めるわけである。

それはなぜだったのか。ヨーロッパに対抗するような「東洋」を持ち出すと、その「東洋」はもう東洋ではなくなってしまう。そのメタファー、暗喩が「茶」だったと思う。対抗しようという態度をとった途端に、その態度が東洋の真髓を裏切ってしまう、という逆説を岡倉はきちんと自覚していた。我々はこの点をこそ『茶の本』から学ぶべきであり、「東洋で連帯して西洋に対抗しよう」といった発想は、少なくとも『茶の本』以降の岡倉が説こうとした思想とは根本的に違うと私は思う。少し哲学的な話になったが、そのように考えている。

Q3 岡倉は中国や朝鮮をどのように捉えていたのか

当時の知識人は、往々にして人種的な偏見を持っていた人が多かったのではないかという印象があるが、インドの人や文化に対して「We are One」というのは理解できるとして、中国や朝鮮に対しては、今の文脈のなかで彼はどのように考えていたと思うか。

(稲賀)

端的に言うと、岡倉の世界観は「唐土(中国)・天竺(インド)・本朝(日本)」の三角形なので、朝鮮はあまり視野に入っていない。むしろ古代では朝鮮と日本を一体のものとして捉えている。では、朝鮮は誰の視野に入ったのかというと、次の世代の柳宗悦である。柳宗悦の場合はスケールが一つ小さくなるが、「中国と韓国と日本はどう違うか」という、その三角形を突き詰めようとしている。岡倉の場合はインドまで実地見聞に行っているが、良きにつけ悪きにつけ、彼の視野から韓半島は外れていた。それを再認識したのが柳だったということになると思う。いずれにしても、その二人が三角形を思い描いていたのが面白い。

そこで思い出す逸話がある。私の尊敬する知人の李御寧(イー・オリョン)氏は、30年ほど前に『縮み志向の日本人』という本を書いて話題になった、韓国の初代の文化大臣で、ソウル・オリンピックを成功させた人である。本日の話に関連して紹介すると、ソウル・オリンピックのオープニングを覚えている人も多いと思うが、最初、競技場に子どもがたった一人出てきたので、皆が驚いた。それを演出したのが李御寧氏であり、そこに密かに託されていたのは、「すべては一つに等しい、一つはすべてに等しい」というメッセージだった。先ほど Advaita の思想を説明したが、この「不二一元論」とともに重要な考えとして「一即多・多即一」が知られる。この理屈を李先生は記号学の真理だと言い換えて丸め込み、国の運命を決するようなオリンピックの開会式で、子どもをたった一人で走らせたわけである。朝鮮民主主義人民共和国では数万人のマスゲームを行うが、たった一人でも同じ価値を発揮する。これは李御寧氏の勇断だったが、私見ではこの発想も、明らかに華嚴経の思想に繋がっている。シャンカラーに帰される「不二一元」も「一即多・多即一」もともに、思想構造としてはその源泉を華嚴経に遡ることができる。そしてそのことを岡倉も理解していた。『茶の本』には個がその他すべての個

と連鎖・共鳴するという、華嚴経の帝釈天の帝網の比喩が登場するからだ。

いささか話が逸れたが、思想の上での相互の感応や伝播の一端がこうして見えてくる。岡倉の認識のなかで朝鮮半島は目立たないが、岡倉のインドも韓国の思想とじつはしっかりと結びついていた。その辺りを探っていくのが、哲学・思想史の醍醐味ではないかと思う。

なぜ李御寧氏の名前を出したかという、たった一人の子どもを走らせたその彼が、韓日中について面白い見解を述べているからである。李先生は『ジャンケン文明論』という本で、韓日中の関係はグー・チョキ・パーの関係だと言っている。二元論ではない。二元論ではどちらが勝ったか、負けたかという話になるが、グー・チョキ・パーは三つ巴で、どれかひとつが一番になるという序列にはならない。日本がグーを出したら、中国がパーですべてを包もうとする。その対立に上手く折り合いをつけるとなると、韓国がチョキを出して面倒をちょん切ってくれる、などなど。そうした循環関係でしかこの3国は成り立たないと李氏は提言する。そこには、ことの真実が含まれていると私は思う。それを現実はどう活かしていくかは大きな課題だが、三角関係は巧みに操る必要があるし、そうしなければアジアも東アジアも上手く回らない。岡倉も柳もそのことを夙に理解していて、現代なら李御寧氏がそれをきちんと弁えて韓国の文化政策を主導された実績がある。先の「東洋共同体」の質問にも関わる論点だが、日本にも李氏のような国際的見識ある政治家が出てきてほしいと思う。

Q4 ビゲローやボースにどのような影響を与えたのか

岡倉は、ビゲローやビハーリー・ボースなどにどのような影響を与えたのか。

(稲賀)

まず、ビゲローは、日本で仏教徒になって琵琶湖の畔の三井寺の山中に墓があるような人で、大変に裕福だったので各地の寺を支援し、日本を行脚したという実績もある。岡倉との関係も山口静一先生が詳しい研究を進めておられるので、著書を参照していただきたい。ボストン美術館には、岡倉が辛亥革命前後の混乱のなかで、早崎稔吉の助けを得て招来した作品も少なくないが、それらの購入の仲介にはビゲローの財力や支援があった。

ボースは、同じ名前の有名人が2人いて、同じ年に亡くなっているので混同しやすいが、「中村屋のボース」と呼ばれたラース・ビハーリー・ボースについては、中島岳志氏が10年ほど前に本を一冊書いている。タゴールが来日したときに、世話をして通訳をしたのが、この「中村屋のボース」である。タゴールは岡倉の追憶を語るが、内田良平や頭山満、黒龍会の人たちとも極めて近いところまで接近し、そうした人脈とも関わるなかで、最後の日本滞在を果たしている。

もう一人はチャンドラ・ボースで、彼は没後半世紀を超えた今でも、ベンガルから少し南の方で大きな政治的な影響力を持っている人である。彼の場合は、戦時中に日本に協力をし、ガンジーの姿勢を政治的妥協だと批判したことで、表向きは必ずしも評判が芳しくない。しかし、実際にインドに行くと、郷里では大変な国民的英雄である。英雄であった所以は、たまたま負けてしまった日本に加担しようとした人ではあるが、目指すところはもちろんイ

ンドの独立だったからである。手段のうえでどうするかという路線の争いはあったが、彼の死後の遺産と名望は、現在に至るまで受け継がれている。

結果的に、今の段階で「歴史の勝者」になった人物は「良い」、そうでない敗者は「悪い」と裁断されがちだが、実際はどうなのか。我々がインドに行くと、そうした日本での常識的なイデオロギーの通念とはまったく別の感情や理解を、現地の人たちが自分たちの先祖や先人たちに対して抱いていることも肌で感じられる。両方を見なければ真実を見落としてしまう。「善」と「悪」という二分法的な価値観で過去を割り切るのは危険だろう。

日本に何度も来ている画家のノンドラル・ボシュも政治家のボースと極めて近い関係にある。この画家は、大英帝国のインド支配について表向きの批判は避けているが、そこには極めてアンビバレントな気持ちと隠された批判精神とが込められている。戦時中の絵画を分析すると、《女神アンナプルナ》は英軍の収奪により発生したベンガルの大飢饉を下敷きにしているし、《燃え上がる松の木》にも、インド独立への「発火」と「昇龍」への祈願が密かに込められていたのではないかと私は推測している。

*

ここまでインドにおける岡倉について、予備的な見解を述べてきた。インドの独立に貢献できた人物は善玉として遇されるが、インドの政治史を一枚剥いてみると、およそ綺麗事では片付かない錯綜した世界である。一方で日本側では、インドの岡倉について、従来ほとんど現場検証がなされてこず、大戦期から敗戦後の思想史研究のイデオロギー的定説を無理やり半世紀前の英領インドに投影して、「超国家主義者・天心」の神話形象を糾弾する姿勢が顕著だった。他方インドでは、いまだに岡倉については、日本政府のスパイ、革命扇動工作員といった認識が残っており、基礎的な事実誤認も少なくない。さらにインドという世界には複数の宗教が濃厚に立ち籠めており、一度足を踏み入れると、宗教色を脱した図式的な思想史的理解ではとても割り切れず、学術的に中立な検討も簡単には参らない。現地で直接の体験をお持ちの方には納得される向きも多いのではないか。はなはだ僭越ながら、インドの方々にも、今私が申し上げた事情にはご賛同いただけるのでは、と考えている。

最後までご清聴いただき、核心をつく幾多の質問を頂戴したことに、深謝申し上げたい。

- * 2023年のブックレット刊行に際して、最低限の補正を加えたが、原則として、2016年8月の講演段階の内容に変更を加えることはせず、それ以降の学術成果を盛り込むことは慎んだ。また出典注記を補うと膨大な紙幅を要するため、これも割愛したことをお断りする。
- * なお、2023年になって外川昌彦『岡倉天心とインド』慶応大学出版会、が刊行され、筆者は同書の書評を『宗教学研究』誌（2023年秋出版予定）に寄せている。本講義で不十分な箇所については、この著書および拙書評をご参照いただくと幸いである。またインド滞在中の横山大観らの作品については現在知られている作品には贋作が含まれているのでは、との嫌疑のあることも、付記しておきたい。

発行日	2023年 月 日
講演著者	稲賀 繁美
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子



満月に照らされて浮かぶ「ゲエテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)